

小学校国語科における口頭作文の学習評価の研究

A Study of leaning evaluation of oral composition in elementary school Japanese classrooms

長谷川 祥子／西山 悦子／小川 智勢子
Sachiko HASEGAWA / Etsuko NISHIYAMA / Chiseko OGAWA

1. 思考を整理し表現する練習としての口頭作文

小学校国語科における「話すこと・聞くこと」の指導は、ここ30年、研究が進んできた領域である。平成29年3月告示の小学学習指導要領では、「話すこと・聞くこと」が、「思考力・判断力・表現力等」の中に置かれている。「話すこと・聞くこと」の指導の重要性は「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「C 読むこと」と、領域の一番初めに示されたことから推察できる。

小学1、2年の国語教科書では、児童が質問し答える中で話し手が話したいことをまとめるという学習活動が扱われるようになった。このように頭の中で文章をまとめ、その場で話すという学習を口頭作文という。「話すこと・聞くこと」の学習として実践されている口頭作文は、思考を整理し表現する練習として、系統的に「話すこと・聞くこと」の指導に位置づける必要性が高まっている。

2. 研究の目的及び研究の方法

本研究では、小学校国語科における口頭作文の学習評価を検討し、系統的な音声言語指導を探求していく。口頭作文を音声言語指導として位置づけ、頭の中で文章をまとめる学習方法とその評価の実際を児童の実態に即して提案する。

研究の方法として次の3点を設定している。

- (1) 口頭作文の学習指導に関する、先行研究を検討する。
- (2) 小学校国語科で実践できるような口頭作文の授業を構想する。
- (3) 検証授業を通し、口頭作文の学習評価の実際を示す。

3. 先行研究

口頭作文は、1930年頃から国語科教育の中で指導され始めた。当初は作文の予備的な指導として実践されていた。伊藤経子（2001）は、口頭作文の位置づけの変化を次のように述べている。

口頭作文は、oral composition の訳語で、戦前（1930年ころ）からいわれている。話し言葉で、思想、感情をまとめたものを口頭作文といい、書き言葉によるものを書記作文といっている。口頭作文は、書記作文のレディネスの学習と考えられていて、①口頭作文を経て書記文章に進むべきだという作文観によるものと、②文字を書く力が乏しいために、書記作文に取り組むのが無理だと思われる時期に、まず口頭作文で表現させるべきだという実際論がある。①も②も、書記作文のレディネスであるという点で共通している。現在、口頭作文を、レディネスという役割にとどめず、言語表現力を伸ばす話し方の学習としての価値と位置づけがみられるようになってきた。^(注1)

倉澤栄吉（1950）は、伊藤（2001）が口頭作文の位置づけの変化を指摘する50年以上前から「低学年に、作文の予備的段階として課せられるというのではなく、上学年、上の学校を通して考えられるべきである。」^(注2)と述べ、口頭作文を全学年における話し言葉の学習として捉えることが必要であると主張している。

そして、「この、レディネスとしての口頭作文は、（中略）発音の指導や、方言の矯正に主眼があるのではなく、次のような点に、主目標をおくべきである。」と、十項目の目標を示している。

- ① 生活上の必要が起きたとき、思い切って発表するような意欲を盛んにする。
- ② 発表する前に、よく調べたり、記憶を新たにしたりする習慣をつける。
- ③ なるべく速くまとめて、すぐ発表できるような態勢をつくる習慣と技術。
- ④ 相手にはっきりとわかるような、適当な内容の選択と配列の技術。
- ⑤ 自分の発音の内容を絶えずその場で反省して、より徹底するように改善していこうとする態度をつくる。
- ⑥ 一事項ごとにまとめて、順々に述べていくような秩序づけの技術。
- ⑦ 一定時間内にきめられた内容を完全に言い切るような工夫を積む。
- ⑧ すばやい思考力をねる、想像力を養う。
- ⑨ 受けた感動をみんなに分ちあいたいと熱望するような感情を盛んにする。
- ⑩ 独創的な個性に富む表現をする。

この他、なお多くの目標が考えられるが、これらの目標を含む、経験を与えていくことが、口頭作文の学習ということになるのである。

以上、倉澤が提案している十項目の目標を整理すると、関心・意欲・態度の目標（①②③⑤⑨）、技術の目標（③④⑥）、思考力・想像力の目標（⑧）、表現力の目標（⑩）に分類することができる。この学習には、劇や物語などの文学的文章の口頭作文と、「経験の発表」（1、2年）、「報告」（3から6年）という論理的文章の口頭作文の両方が含まれている。^(注3)

石井茂（1971）は、「書くこと」の指導過程に口頭作文を取り入れた実践を報告している。小学1、

2 年が「構想メモ」の記述後、数人が 口頭で文を言い、発表について気づいた点をその場で指導している。他の児童は教師の添削を聞き、自己の「構想メモ」を修正する。「いろいろ気づいた点を簡単に指示し、指導する」^(注4)とあり、具体的な様子についての報告は見当たらない。

中列正堯（1981）は、口頭作文を次のように定義している。

ある題材を「表現」の意図をもって（すなわち話題として）構成的に話すこともしくは話されるものをさす。^(注5)

「構成的に話すこと」とあるが、具体的にどのような構成で話すのかについては言及していない。

市毛勝雄（1998）は、思考力の育成に踏み込んで口頭作文の意義を次のように述べている。

口頭作文は文章を頭の中でまとめる練習の初歩であると同時に、思考を整理し、表現する練習として、大人になっても有効な学習方法である。（中略）口頭作文を学習するためには、基礎的な文章構成に基づいて、簡単な文章をまとめる練習から始める。これは、小学1年生から中学生、さらには大人に至るまで共通である。^(注6)

このように、市毛は思考技術を育成する音声言語指導の一つとして口頭作文を位置づけている。基礎的な文章構成を提案しているが、口頭作文の実際についての報告はない。

永井和行・浜田麻里（2014）が、文型にしたがって口頭で繰り返し文章を作る練習を「口頭作文練習」と名づけて、「口頭作文練習」を活用した小学3年の作文指導実践を報告している。^(注7) この実践で使用されている「文型」は、二つの事例から考察を述べるといふ帰納論理に基づいた論理的文章構成である。

吉永幸司（2016）は、小学4年に、四つの文を意識させた口頭作文の実践を報告している。^(注8) 頼山陽の「起承転結」の俗謡から四行作文を思い立ち、次のような条件を与えている。

- 1 行目 話の始まり
- 2 行目 話したいこと
- 3 行目 話したいこと
- 4 行目 気持ちを表す言葉を入れて文をまとめる

そして、四行作文による口頭作文実施の様子とその後の意欲の変化について、次のように報告している。

このように形が決まると、表現意欲を高めるのが四年生である。自己紹介から友達紹介、さらには読んでいる本についてなど話題を広げていった。特に四行目に魅力があった。「山田君が友達であることを誇りにしています。（友達紹介）「役に立つ本ですから読んで下さい。（読書のすすめ）など、「うれしい」とか「楽しい」という言葉を使うことに慣れた子ども達の意識を変えたのが分かる。そして、授業の終わりには「作文が好き」と言い出したのである。それから、そのクラスでは四行作文が流行した。日記に活用したり、毎日、新聞の切り抜きに四行で感想を書く活動を四年生最後の日まで続けた子もあった。

吉永はこのように、四つの文で構成する文章構成に基づいて話をさせる口頭作文を実施し、その学習活動が四行作文という書く活動につながったと報告している。

吉永（2016）の実践は2、3行目が「話したいこと」とあいまいな条件設定になっているが、報

告の実際をみると、2、3行目は4行目のまとめに結びつく具体的事例を挙げている。四行作文は、帰納論理に基づく文章構成となっている。吉永の実践報告は、市毛が示した文章構成の具体的な実践を示しており、文章構成を示して話をすることの重要性を指摘している。しかし、音声言語としての位置づけではなく「書くこと」の前段階の学習で終わっている。

平成27年度版の小学1、2年の国語科教科書の「話すこと・聞くこと」の単元は、そのほとんどが口頭作文となっている。テーマも自分の好きなことや体験したことなど、身近な題材を設定している。口頭で質問をし合うなどのグループ活動を設定している学習では評価方法に課題がある。

4. 口頭作文の文章構成

論理的思考力を育成するために、帰納論理に基づく文章構成が小学校国語科の教科書でも多数みられるようになってきた。1年から6年まで、共通の文章構成で一貫して口頭作文を指導することで、論理的に話す力を身につけることができると考えた。

市毛(1998)が提案している文章構成の型「はじめ・なか1・なか2・まとめ」は、具体的事例を複数並べてその共通する性質を述べる帰納論理に基づく文章構成である。

文章構成の型は、次のように示すことができる。

はじめ	あらまし
なか1	具体的事例1
なか2	具体的事例2
まとめ	「なか1」と「なか2」に共通する性質

口頭作文を指導する際には、この文章構成の型で次のような例文で児童に示すと、学習の効果が期待できる。

はじめ	きのう、こうえんであそびました。
なか1	ブランコをしました。
なか2	すべりだいをしました。
まとめ	たのしかったです。

文章構成の型を示した後で「たのしかった」具体的事例を自分の体験の中から二つ選び、話すことを指導する。

5. 口頭作文年間計画及びその成果と課題

20XX年度に文章構成の型「はじめ・なか1・なか2・まとめ」で話す口頭作文の指導について、年間計画を立てている。文字を習い始めの1年と、2年を分けて計画し、3年から6年で一つの計画を立て、学年に応じて3種類の年間計画を立てている。

(1) 小学1年 口頭作文年間計画

20XX年度小学1年の初めは、口頭作文の例文を提示し、口頭での添削指導によって話し方を指導した。7月になって、「はじめ・なか1・なか2・まとめ」という文章構成の言葉を教えた。学校全体の取り組みで毎日家の手伝いに取り組ませている。そのこともあり、「お手伝い」をテーマとした口頭作文を2学期と3学期の2回計画している。

No.	月	テーマ	内 容
1	5月から 7月	お休み中にしたこと	経験したことの中から、二つ選んで話す。朝の会で、日直の二人が話す。
2	6月	運動会	「はじめ」の言葉を同じ文とし、運動会から二つの事柄を選んで話す。
3	7月	1学期頑張ったこと	1学期頑張ったことを二つ選んで話す。「はじめ・なか1・なか2・まとめ」を指導する。
4	9月	夏休みにしたこと	夏休みにしたことの中から二つの事柄を選んで話す。
5	9月 10月	お手伝い①	自分がした手伝いから、二つの事柄を選んで話す。朝の会で、日直の二人が話す。
6	11月 12月	一日を振り返って	帰りの会で、今日一日の学校生活の中で心に残ったことを話す。日直の二人が話す。
7	12月	2学期頑張ったこと	2学期を振り返って、頑張ったことを二つ選んで話す。
8	1月	冬休みにしたこと	冬休みにしたことの中から二つの事柄を選んで話す。
9	1月	お手伝い②	「なか」を二文で話すように指導し、2学期のときよりも詳しく話す。
10	3月	3学期頑張ったこと	3学期を振り返って、頑張ったことを二つ選んで話す。

(成果) ① 自分の体験を短い文で分かりやすくみんなに伝えることができるようになった。

② 3学期の「お手伝い」では、「なか」を二文で話すように指導し、9～10月の1回目よりも詳しく話すことができる児童が増えた。

(課題) ① 声が小さい児童や言葉に詰まってしまう児童に対しては特に配慮し、個別の指導が必要である。

② 音声言語はその場で消えてしまうため、できる範囲で録音を基に文字化して口頭作文を掲示するなどの工夫があるといよい。

(2) 小学2年 口頭作文年間計画

20XX年度小学2年では、口頭作文の発表者を一人にして、二人の児童から質問を受けるという計画を立てている。小学2年では、口頭作文とともに、基本的文章構成の型で小論文を書かせる指導を、一年に5回計画している。※今日のニュース…帰りの会で1日の出来事を振り返って話す。年間を通して実施。

No.	月	口頭作文		No.	小論文
		テーマ	内容		
1	4月	自己紹介 *今日のニュース	自己紹介カードに書いたキーワードから二つ選んで紹介する。(好きなこと・とくいなこと等)		
2	5月	お休み中にしたこと	経験したことの中から、二つ選んで話す。朝の会で日直の一人が話す。二人から質問を受ける。	1	運動会
	6月			2	お手伝い
3	7月	1学期を振り返って	1学期を振り返って心に残ったことを二つ選んで話す。		
4	9月	夏休みの思い出	夏休みに書いた一行日記の中から二つの事柄を選んで話す。	3	全校遠足
5	10月	お手伝い	今、自分がしているお手伝いについて話す。二人から質問を受ける。		
6	11月	本の紹介	本を一冊紹介する。	4	おいもパーティー
7	12月	2学期を振り返って	2学期を振り返って心に残ったことを二つ選んで話す。		
8	1月	冬休みの思い出	冬休みに書いた一行日記の中から二つの事柄を選んで話す。		
9	2月	昨日したこと	経験したことの中から、二つ選んで話す。朝の会で日直の一人が話す。二人から質問を受ける。	5	6年生を送る会
10	3月	できるようになったこと	一年間を振り返ってできるようになったことを二つ話す。		

(成果) ① 自分の体験の中から二つの事柄を選んで話すことができるようになった。

② 「なか」を二文で話すように指導することで、「なか」を詳しく話すことができる児童が増えた。

③ 初めは、何を質問してよいかわからず「○○の他にありますか」という質問をしてしまう。質問の仕方を指導することで、聞く力の向上とともに質問する力の向上もみられた。

(課題) ① みんなの前で話すことが苦手な児童は、不安のため、前日に紙に書いて読み上げていた。繰り返し体験する中で話し方を学ばせ、自信をもたせていきたい。

② 問いかけるように話す話し方や、相手に応じた話し方などの話す技術については、別の時間に別のテーマで話し方の指導をする必要がある。

(3) 小学3から6年 口頭作文年間計画

20XX年度学期の終わりは、全員が心に残ったことを話す計画を立てている。自分の体験の中から事柄を二つ選んで話をするため、調べたり考えたりする準備の時間をほとんどとらずに実践できる。

No.	月	口頭作文		No.	小論文
		テーマ	内容		
1	4月	自己紹介	自分の名前、得意なことを紹介する。		
2	5月	休み中にしたこと	経験したことの中から、二つ選んで話す。朝の会で日直の一人が話す。	1	運動会
	6月			2	全校遠足
3	7月	1学期を振り返って	1学期を振り返って心に残ったことを二つ選んで話す。		
4	9月	夏休みの思い出	夏休みに書いた一行日記の中から二つの事柄を選んで話す。		
5	10月	休み中にしたこと	質問を受ける。質問者も順番に回す。	3	お手伝い
6	11月	本の紹介	本を一人一冊紹介する。	4	社会科見学
7	12月	2学期を振り返って	2学期を振り返って心に残ったことを二つ選んで話す。		
8	1月	冬休みの思い出	冬休みに書いた一行日記の中から二つの事柄を選んで話す。		
9	2月	休み中にしたこと	2学期の時よりも、「なか」を詳しく話す。	5	6年生を送る会
10	3月	1年間の思い出	1年間を振り返って二つ話す。		

(成果) ① 継続して同じ文章構成で口頭作文に取り組んだ結果、事実と感想を分けて分かりやすく話す児童が増えた。

② 本の紹介では日頃の読書記録を活用し、休み明けの口頭作文では一行日記を活用して、「なか」を二つ選んで話すことができた。

(課題) ① 学期末、全員が話す計画の際は、人数が多いため、1時間以上かかってしまった。

② 3年から6年まで一つの指導計画としたが、さらに、学年に応じて計画を立てることも必要である。

6. 口頭作文添削・評価の実際 1 (A小学校1年)

小学1年の1学期の口頭作文の実践を二つ報告する。一つは、日常の体験をテーマにした口頭作文で、もう一つは学校行事をテーマにした口頭作文である。

口頭作文の実際の中で、授業者の発問・指示・添削をT、児童の言葉をCで示した。以下の事例全て同様である。

(1) 実践1 1学期 日直の口頭作文

- ① 実施日 20XX年5月から7月 朝の会のスピーチ
- ② 発表所要時間 一人1分以内 一日に二人ずつ発表
- ③ 対 象 小学1年32名
- ④ テーマ お休み中にしたこと
- ⑤ 目 標 「はじめ・なか1・なか2・まとめ」の文章構成で話す方法を知る。
- ⑥ 口頭作文の実際

ア 児童1 (言葉がなかなか出てこない)

- T お休みの時にしたことを話しましょう。
- C お休み中に、バーベキューをしました。………… (沈黙)
- T バーベキューで何を食べましたか？
- C …………… (沈黙)
- T お肉を食べましたか。
- C (うなづく)
- T 野菜も食べましたか。
- C (うなづく)
- T では、こう言いましょう。
- お休み中にバーベキューをしました。(はじめ)
- お肉を食べました。(なか1)
- 野菜を食べました。(なか2)
- C (まねをして言う)
- T おいしかったですか。
- C おいしかったです。(まとめ)
- T とっても上手に話せました。

- (考察) i 「なか」で話す二つの具体的事例を授業者の質問によって児童から引き出している。
- ii 「おいしかったですか。」と感想を聞き、「まとめ」の言葉を話せるようにしている。
- iii 小学1年の児童にとって、自分が体験したことを言葉で言い表すのは、とても大変な学習である。

イ 児童2 (独り言のような話をどんどん始める)

- C きのうね、Yちゃんの誕生日でね。
- T Yちゃんって誰ですか。
- C Yちゃんってぼくの弟。そんでね、プレゼントがね、プレゼントもらってね、今日もあげてね。
- T プレゼント〇〇さんがあげたのですね。

C そう、プレゼントはほくがあげたのね、そんで、今日もあげるの。

T ○○さんは、弟のYちゃんのことが大好きなのですね。

C ううん、大好きじゃないの。かわいいの。今日も、ほくが、また、プレゼントあげるの。

T では、こう言いましょう。

昨日、弟のYちゃんの誕生日でした。(はじめ)

ほくはプレゼントをあげました。(なか1)

今日もまたプレゼントをあげます。(なか2)

弟は、かわいいです。(まとめ)

C (繰り返す)

T とっても上手にお話できましたね。

(考察) i 授業者からの質問によって児童が話したいことを把握し、みんなに分かるように伝える話し方を教えている。

ii 「はじめ・なか1・なか2・まとめ」の文章構成を教えるという添削指導の観点が明確だったため、児童の体験を整理し、話し方を示すことができた。

ウ 児童3 (いくつもの事柄を、切れ目なく続けて話す)

C お休みに遊園地に行って、それからジェットコースターに乗って……それから……。

T 「お休みに遊園地に行きました。ジェットコースターに乘りました。」と言いましょう。

C お休みに遊園地に行きました。(はじめ)

ジェットコースターに乘りました。(なか1)

観覧車に乘りました。(なか2)

楽しかったです。(まとめ)

T 遊園地でしたことを二つ上手にお話できましたね。

(考察) i 自分がしたことを思い出して、次々と言葉に出して話すことができる児童である。

ii 一つの事柄を一文で表現する話し方を口頭で教えた。

iii この口頭での添削の様子を聞くことで、一文で短く言う話し方を他の児童も一緒に学ぶことができる。

(2) 実践2 学校行事をテーマにした口頭作文

① 実施日 20XX年6月6日

② 発表所要時間 2時間

③ 対 象 小学1年32名

④ テーマ 運動会

⑤ 目 標 「はじめ・なか1・なか2・まとめ」の文章構成で話すことができる。

⑥ 口頭作文の実際

ア 児童1 (具体的事例を一つだけ話している)

C 6月3日に運動会がありました。 (はじめ)

徒競走で1位を取りました。 (なか1)

うれしかったです。 (まとめ)

T うれしかったことをもう一つ言いましょう。(始めに運動会でしたことを出し合い
い黑板に書いておいたキーワードを指し示しながら) 徒競走の他にうれしかったこ
とはありましたか。

C ダンシング玉入れで勝ったことです。

T では、「ダンシング玉入れで勝ちました」を徒競走の次に言ってみましょう。

C 6月3日に運動会がありました。 (はじめ)

徒競走で1位を取りました。 (なか1)

ダンシング玉入れで勝ちました。 (なか2)

うれしかったです。 (まとめ)

(考察) i 発表をする前に、具体的事例について何があったのかみんなで考えて書き出して
いた。児童は具体的事例をもう一つ選ぶときに、板書を見ながら、自分の体験に当て
はまる具体的事例を選択することができた。

ii 学校行事という共通の体験から二つ選んで話す活動により、論理的な組み立てをし
て話す経験を積んでいる。

イ 児童2 (具体的事例と感想を分けていない)

C 6月3日に運動会がありました。 (はじめ)

大玉送りで負けちゃいました。 (なか1)

リレーで3位で悔しかったです。 (なか2とまとめ)

T 大玉送りで負けてしまったことと、リレーで三位になったこと、どちらも悔しかっ
たのですね。

C はい。

T では、大玉送りで負けてしまいました。リレーで3位でした。悔しかったです。
と話しましょう。

C 6月3日に運動会がありました。 (はじめ)

大玉送りで負けてしまいました。 (なか1)

リレーで3位でした。 (なか2)

悔しかったです。 (まとめ)

T 悔しかったことを二つお話できましたね。

(考察) i 具体的事例と感想をつなげて一文で言っているため、事実と感想を分けて話す方法を教えている。

ii 授業者の言葉によって、「悔しかった」という感想が二つの具体的事例のどちらにも共通の感想であることを確認している。

ウ 児童3 (具体的事例と感想が合わない)

C 6月3日に運動会がありました。 (はじめ)

ラッキーフラッグで1位になりました。 (なか1)

赤組は負けてしまいました。 (なか2)

悔しかったです。 (まとめ)

T ラッキーフラッグで一位になってうれしかったですか。

C はい。

T それでは、運動会でうれしかったことを二つ話しましょう。

C 6月3日に運動会がありました。 (はじめ)

ラッキーフラッグで一位になりました。 (なか1)

上手に行進できました。 (なか2)

とてもうれしかったです。 (まとめ)

T うれしかったことを二つ、上手にお話できましたね。

(考察) i 「1位になった」という具体的事例は、「悔しかった」という感想に合わない。

ii 「まとめ」を決めて、それに合う具体的事例「なか」を二つ選ぶという思考活動の練習をしているため、授業者が「まとめ」を決めて具体的事例を考えるように助言した。

7. 口頭作文添削・評価の実際2 (B小学校2年)

小学2年の口頭作文の実践を二つ報告する。全体の評価をABCの3段階評価、段落評価を◎○△で丸かっこ内に示した。以下同様である。

(1) 実践1 1学期 日直の口頭作文

① 実施日 20XX年7月 朝の会のスピーチ

② 発表所要時間 一人1分以内、一日に二人ずつ発表

③ 対象 小学2年25名

④ テーマ お休み中にしたこと

⑤ 目標 「はじめ・なか1・なか2・まとめ」の文章構成で話することができる。

⑥ 口頭作文の実際

ア 児童1 (評価A)

- 学童クラブのいいところを説明します。 (はじめ) ○
- 一つ目は、おやつがあることです。おやつ
でおせんべいやマシュマロが出ます。 (なか1) ◎
- 二つ目は、校庭遊びがあることです。一輪
車や登り棒ができます。 (なか2) ◎
- だからこのクラブが大好きです (まとめ) ○

イ 児童2 (評価B)

- ボーイスカウトで、パピコの工場に行きました。 (はじめ) ○
- パピコの作り方を教えてもらいました。 (なか1) ○
- 巨大冷凍庫に入りました。 (なか2) ○
- 楽しかったです。 (まとめ) ○

ウ 児童3 (評価C)

- 土曜日にオセログランプリに出ました。 (はじめ) ○
- 連敗で悲しいです。 (なか1) △
- 対戦は6回でした。 (なか2) ○
- 楽しかったです。 (まとめ) ○

- (考察) i 児童1は、「なか」を二文で話していて、「なか」を詳しく話すことができています。
- ii 児童2は、「なか」で具体的事例を一つずつ話すことができています。
- iii 児童3は、「なか1」で感想を話したため全体の評価がC評価となっている。

(2) 実践2 2学期日直の口頭作文

- ① 実施日 20XX年9月から10月 朝の会のスピーチ
- ② 発表所要時間 一人1分以内、一日に二人ずつ発表
- ③ 対 象 小学2年25名
- ④ テーマ お休み中にしたこと、または、今日一日を振り返って
- ⑤ 目 標 「はじめ・なか1・なか2・まとめ」の文章構成で話すことができる。
- ⑥ 口頭作文の実際

児童の発表後、授業者が添削の言葉を述べ、児童がその場で話し直している。

ア 児童1 (評価B)

- C サッカーのリーグ戦がありました。 (はじめ) ○
- 試合に出ました。 (なか1) ○
- 負けました。 (なか2) △
- 悔しかったです。 (まとめ) ○

T 試合でどんなことをしたか、二つ思い出して「なか」で話しましょう。

- C サッカーの試合がありました。 (はじめ) ○
 ボールを蹴りました。 (なか1) ○
 シュートはしませんでした。 (なか2) ○
 悔しかったです。 (まとめ) ○

イ 児童2 (評価A)

- C 今日のことを話します。 (はじめ) ○
 国語をしました。 (なか1) ○
 算数をしました。 (なか2) ○
 楽しかったです。 (まとめ) ○
- T 国語の中身を一つ、算数の中身を一つ言うと、「なか」が詳しくなりますよ。
 今日のことを話します。 (はじめ) ○
 国語をしました。漢字を習いました。 (なか1) ◎
 算数をしました。引き算をやりました。 (なか2) ◎
 楽しかったです。 (まとめ) ○

(考察) i 児童2は授業者の言葉によってすぐに、つけ足して、「なか」を2文で言うことができた。

ii 帰りの会で、今日一日を振り返って口頭作文を発表する方が、共通体験の口頭作文のため助言がしやすい。

8. 口頭作文添削・評価の実際3 (A小学校4年)

次に、小学4年の口頭作文の実践を二つ報告する。1学期末と、夏休み明けの実践である。どちらも、1時間計画で実施した。

(1) 実践1 1学期末の口頭作文

- ① 実施日 20XX年7月19日 (金) 1時間計画
- ② 発表所要時間 35分
- ③ 対象 小学4年39名
- ④ テーマ 1学期を振り返って
- ⑤ 目標 「はじめ・なか1・なか2・まとめ」の文章構成で「なか」を詳しく話することができる。
- ⑥ 口頭作文の実際

ア 児童1 (評価B)

私が1学期頑張ったことは、二つあります。 (はじめ) ○

一つ目は、3年の時より字が上手くなったことです。自主学習ノートとかで字を丁寧に書くと、学校でも丁寧に書けて、だんだん上手になって、字が上手になってきました。

(なか1) ○

二つ目は、運動会のパブリカです。練習ではあんまり回り方とかが分からなかったけど、本番では失敗もせずにみんなで楽しく踊れたので良かったです。

(なか2) △

(考察) i 児童1は、「まとめ」がない。「なか2」で「○○したので、よかったです」と気持ちの理由を話す表現が他の児童にも多くみられた。事実を正確に話すことよりも、理由をつけて話そうという意識の方が強い。

ii 理由をつけて話そうとすると、このような理由と感想の発表になり、「なか」の事実を詳しく話すことができなくなる。

(2) 実践2 夏休み明けの口頭作文

① 実施日 20XX年8月27日 1時間計画

② 発表所要時間 55分

③ 対象 小学4年39名

④ テーマ 夏休みを振り返って

⑤ 目標 「はじめ・なか1・なか2・まとめ」の文章構成で「なか」を詳しく話すことができる。

⑥ 口頭作文の実際

ア 児童1 (評価B)

C ぼくは、静岡県に行ったことを二つ話します。

(はじめ) ○

一つ目は、弓ヶ浜という海に行きました。弓ヶ浜でシュノーケルをしました。ウツボなどがいて怖かったです。

(なか1) △

T ウツボがいるとなぜ怖いのですか。

C なんか、ウツボが噛んできそうで。

T じゃあ、そのことを言ってみましょう。

C ウツボがいて噛んできそうで怖かったです。

二つ目は、動物園に行ったことです。シマウマに餌をあげようとしたら、ヤギに餌を食べられてしまいました。

(なか2) ○

二つとも、思い出ができたのでよかったです。(まとめ) ○

(考察) i 怖いという感想に対してなぜそう感じたのか理由を問うことで、ウツボの様子が少し詳しくなった。

ii 二つの具体的事例がどんな思い出になったのか、楽しかったのかおもしろかったのか、「まとめ」で話すことができると、A評価になる。

イ 児童2 (評価B)

C 私は夏休みに家族で海に行きました。(はじめ) ○

最初に海に行って、波に乗って、浮き輪に乗ったり、シュノーケルをつけて魚を見たりしました。

(なか1) △

次にお兄ちゃんとお母さんで……ボール投げをやつって何だっけ…砂浜で…

T ビーチバレーですか？

C あっ、ビーチバレーをしました。けれども、風があつたり砂浜が熱かつたりで続きませんでした。

(なか2) ○

両方楽しかったです。

(まとめ) ○

T 「なか1」のキーワードは何でしたか。……いろんなことをいっぱい言ってくれましたが、その中から一つ選んで話してみましょう。時間の順序で話すのではなく、二つ選んで話す話し方の練習をしているので、順番が逆になってもいいですよ。もう一度言ってみますか。

C はい。私は海に行ったことを二つ話します。(はじめ) ○

まず、海に行って、シュノーケルをつけて魚を見ました。コブダイとか小さな魚がいっぱいいました。

(なか1) ◎

二つ目は、ビーチバレーをしたことです。風があつたり砂浜が熱かつたりしたので、続きませんでした。

(なか2) ○

家族で海に行ったことは、とても楽しかったです。

(まとめ) ○

T すばらしいですね。「なか1」のシュノーケルが詳しくなりましたね。上手になりました。

(考察) i 多くの具体的事例の中から、一つの具体的事例に絞って話し直したことで、「なか1」の様子が詳しくなった。

ii 「なか2」では、児童が言葉に詰まったため授業者が言葉を示して体験に名づけをし

ている。授業者と児童との会話により、体験を示す語彙力の向上を図ることができる。

9. 口頭作文の学習事項

これまでの授業実践を踏まえて、口頭作文を音声言語の学習として、文章構成を示して実践した。口頭作文の学習事項を、「構成、技能、話し方、聞き方、質問の仕方」の五つの項目で3点ずつまとめた。これらは、1年から6年まで共通に指導する基本的な学習事項と考えている。全部を一度に指導するのではなく、児童の各項目の到達段階に応じて、段階的に指導するとよい。

(1) 構成

- ① 「はじめ」に全体のあらましを述べる。
- ② 「なか」では、事実を述べる。
- ③ 「まとめ」に合う「なか」を二つ話す。

(2) 技能

- ① 「～して、～して」と続けて話さない。
- ② 一文を短く話す。
- ③ 事実と感想を分けて話す。

(3) 話し方

- ① みんなに聞こえる声で話す。
- ② ゆっくりはっきり話す。
- ③ みんなの方を見ながら話す。

(4) 聞き方

- ① 話している人を見る。
- ② キーワードは何か考えながら聞く。
- ③ 自分の体験と比べながら聞く。

(5) 質問の仕方

- ① 「なか」が詳しくなる質問をする。

- ② 意味が分からない言葉があったら言葉の意味を質問する。
- ③ 質問の答えに対して一言感想を言う。

10. まとめ

小学1年から継続して口頭作文において帰納論理に基づく文章構成を指導し、自分の体験を言葉にしてその場で話す口頭作文を学習することにより、まとまりのある話し方へと導くことができることが分かった。

特に小学1年の4月は公的な話し方が全く分からない児童に、みんなに分かりやすく話す方法を授業者と児童とのその場での会話によって添削評価し、公的な話し方を身につけさせることができる。

また、口頭作文に対する児童からの質問の仕方を指導することは、具体と抽象の関係を理解する力を身につけることができ、論理的思考力の向上を図ることになる。一方、話す側は、質問されることで「なか」を詳しく話す方法の向上を図ることができる。

口頭作文は、文章をまとめる練習の初歩であるとともに、思考を整理し、表現する練習として、大人になっても必要な方法であることを実践的に検討することができた。

今後は、口頭作文添削指導を小学5、6年でも継続し、その有効性を検証していくことが課題である。

「注」

- 1、伊藤経子（2001）「口頭作文」日本国語教育学会編『国語教育辞典』朝倉書店、133.
- 2、倉澤栄吉（1989）「口頭作文」『倉澤栄吉国語教育全集 第十巻 話しことばによる人間形成』角川書店、327.
初出は、東京教育大学教育学研究室編『国語教育』教育大学講座二三、金子書房、1950年.
- 3、前掲同書、329 - 330.
- 4、石井茂（1971）「口頭作文の意義」全国大学国語教育学会編『国語科教育』第十八集、39.
- 5、中刈正堯（1981）「口頭作文」野地潤家編『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書、79.
- 6、市毛勝雄（1998）『市毛勝雄著作集 第2巻 国語科教育の授業改革論』明治図書、60.
- 7、永井和行・浜田麻里（2014）「小学校国語科における音声表現による作文指導 口頭作文練習を取り入れた授業の開発」『言語教育実践イマ×ココ』№2.
- 8、吉永幸司（2016）「4行作文を書く、4行作文を意識して話す」ぶんけい月間教育コラム2016年2月、
<https://www.bunkei.co.jp/index.html> 2019年9月19日確認